

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Elementary school students visit Gaidai
supporting elementary school English activity as a
local human resource

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横田, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/524

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



小学生の外大訪問

——地域の人的資源としての小学校英語活動支援——

横 田 玲 子

1. はじめに

2004年度、神戸市外国語大学（以下、「外大」）の大学院英語教育学専攻が設置されて以来、筆者は近隣の小学校に対しての英語活動支援をさまざまな形で実施してきた。その主なものは、神戸市立東町小学校の4年生から6年生までの英語活動支援であるが、本稿ではその中でもきわめてユニークで地域貢献として大きな役割を果たしていると思われる東町小学校6年生の外大訪問についての実践をまとめる。また本稿は前年度の外大論叢掲載の「小学校英語活動支援 — 地域の人的資源として —」の続編としての意味を持つ。それゆえに前稿で述べた小学校英語活動の概要や文科省における位置づけについては省略する。

2. 「外大訪問」、ことの発端

東町小学校の6年生が年に1回外大を訪問し、「英語で先生がたや学生たちにインタビューをする」という活動は2005年度に開始され、今年2008度も含めてすでに4回を重ねた。小学生という普段大学側にとってはなじみのない年代の児童ら100人もが一度に来校するという一方で、ある程度詳細な計画と準備、また共通理解と多くの協力があって実現に至っている。事実毎回多くの教職員と学生ボランティアの協力によって実施されてきた。

外大訪問というアイデアが生まれ出たのは2005年度の6年生の英語活動の

支援にさかのぼる。当時3クラスの6年生はその前年度、5年生の時に担任以外の先生へインタビューに行こう、という英語活動を行った。(この部分の実践についての詳細は外大論争第58巻第2号6,7ページを参照されたい。)その5年生らが6年生になったとき、当時の6年生担任から「前年度の英語活動との関連と発展を兼ねて、インタビュープロジェクトをもう一度行い、今度は校内ではなく、出来ることなら外大に行って何人かの外大教員を含む先生がたと学生さんたちにインタビューさせてもらうことはお願いできないだろうか」という申し出があった。申し出の実際の言葉は大変控え目であったように記憶しているが、教科書もなく活動全体が混沌としていた小学校英語活動において、教科書がないからこそ生まれ得るアイデアと受け取れた。また外大としても地域の人的資源として大きく貢献できるのではないかと思われ、担任のその申し出を外大に持ち帰って具体的な実施案を考えるに至った。

3. 実現までの経緯

2008年度現在、地域貢献は大学の中期計画の中での位置づけもあり、担当部署もはっきりしているが、外大訪問を実現化しようとした2005年度当時は計画案をどこの部署に持って行って実現できるのかの見当もなく、小学校側の求める内容とそれに応えられる部分の具体的な案を筆者が作り、当時の学生部長、また英語教育学専攻、および教職担当の何人かの教員に相談した。小学校英語活動支援は筆者と大学院生とで行ってきた内容の性格上、教職科目や学部の児童英語教育等大学の授業とは直接大きなかわりがないため、大学の授業の延長という位置づけはできず、むしろ高校生が外大訪問に来ることと同列で考え、「小学生の外大訪問」という形で実施すればいいのではないかということになった。ただし、高校生らの訪問と違うのは実際に児童が研究室に訪問してなんらかの質問をするという部分があるので、訪問の主旨と内容を教授会で学生部長報告の中で報告すること、また著者自身が英語

教育学専攻の教員を中心に何人かの教員に具体的に前もって説明に行き協力を要請することにして2005年度の実施を具体化した。

日程に関してはなるべく協力していただける教員が研究室に在室しており、なおかつ大学の授業に支障がない日、ということで教授会のない水曜日の午後を予定した。個別に何人もの教員に協力の要請に伺ったが、ほとんどの教員がこの計画の主旨と内容への理解を示して下さり、協力を快諾して下さいましたことは著者にとって何より心強いことだった。

実施の日程も決まり、それに向けての6年生の英語活動全体の計画が作られていった。「外大に行って英語で大学の先生や学生にインタビューをしよう!」という小学校担任側からのアイデアが子供たちの前で発表されたとき、多くの子供たちは単純に驚いていた。しかし、6年生のどのクラスの窓からも研究棟がはっきり見え「あそこが外大だ」ということを示したり、「大学祭の時に外大に行ったことがある!」という子供がクラスにいたこと、また前年度にも外大の学生が英語支援のために東町小学校に来ていたことなどを話すうちに、子どもたちの多くが「外大に行ってみよう!」と言い出し、「外大訪問プロジェクト」は一気に子供たちに英語活動への動機を高めることになったと著者は強く感じた。

以上が実施に至る経緯であるが、2005年度以降、回を重ねるたびに多くの教員の協力を得て毎年実施されている。実施時期は7月であったり12月であったりするが、1年に一度100人もの小学生がキャンパスにグループごとに散らばり約2時間強の時間を過ごすこの活動は小学生のみならず、ボランティアで参加する学部生、あるいは小学生の訪問を受ける側の教員にとっても笑顔のあふれる異文化経験になっているのではないと思われる。

4. 「外大訪問」における英語活動としての理論的根拠

外大訪問のみならず、小学校の英語活動支援にかかわる上で、またそれ以外の教育活動において筆者自身が常に心にとめている言語習得の理論の一つ

はホール・ランゲージである。一言でいえば、言語を細かい部分に分けて学習させるのではなく、言語のもつ本質的な「意味を運ぶ」という機能を優先させるとともに、学習者が使いたいと思い、使おうとし、実際に使うことによって言語習得を促すという理論である。そしてそのためには、実の場で有効な環境、つまりオーセンティックな状況があって言語習得は有効に行われると説明されている。

第2言語教育でない日本の外国語教育において、英語を使うオーセンティックな状況というのはごく限定されざるを得ず、「外大訪問」となぜ英語でやるのか、という疑問は当然湧いてくるし、それならば神戸の町中で外国人を見つけてインタビューしてみればいいのではないかとか、6年生で修学旅行に行った先で外国人にインタビューする、ということのほうが「本当の場」で英語を使う、ということになるのではないかという意見もあるかもしれない。それらの件に関しての考察は本稿の目的ではないので踏み込むことをしませんが、あえて言うならば、現在の社会的状況の中で子どもたちが街中で場当たりの外国人に自分の英語が通じるかどうかのために声をかけることを教育の場で勧めることはできないだろう。また修学旅行先の観光名所に団体で来ている多くの場合100人以上の小学生が、同じく観光に来ている外国人をつかまえてインタビューするということが「実の場」としての意味をどれほど持つのか、また学校教育としての範囲内でそれらをどのようにとらえるかを考えるとこれも疑問が残る。小学生の外国語教育では教室に外国人講師を迎えることが多くの場合、オーセンティックな言語使用の状況になると思われるが、その機会も現実には年に数回程度であるのが現実である。「外大訪問」での英語インタビューは日本人教師が相手の場合は「英語でなくてはならない」という必然性には欠けるかもしれないが、少なくとも英語を使える場を提供することによって、子供たち一人一人が実際に英語を使う機会を得るとともに、外大で教えている他の外国語にも接することができる場ともなることが予測された。

ホールランゲージについてはグッドマン（1986）がどのような場合に言語の学習が容易になるかを11の項目に分けて説明しているがその中でも「外大訪問」は以下の項目が当てはまるといえよう。

It's part of a real event.

It has a purpose for the learner.

It's accessible to the learner.

The learner has power to use it. (p.8)

外大訪問における英語でのインタビューは確かに現実のイベントの中で行われる言語活動であり、子どもたちが日ごろ接することのない大学教員や大学生と触れ合う機会である。また前年度までの英語活動での知識を活用しつつ新たな表現を覚えながら、自分の質問したいことを英語で尋ねられるだけの準備をし、子供たち自身がそれを生かす力を持ってこそ実現する。

ホール・ランゲージを第2言語習得に焦点を当てて述べているフリーマン（1992）はホール・ランゲージの原則を以下の7点にまとめている。

1. Learning proceeds from whole to part.
2. Lessons should be learner centered because learning is the active construction of knowledge by the student.
3. Lessons should have meaning and purpose for students now.
4. Learning takes place as groups engage in meaningful social interaction.
5. In a second language, oral and written languages are acquired simultaneously.
6. Learning should take place in the first language to build concepts and facilitate the acquisition of English.
7. Learning potential is expanded through faith in the learner.

(p.8)

「外大に行くぞ」という「全体」(Whole)としての活動の目的、概要が子

供たち自身に理解でき、そのために必要な「部分」(part)の活動を組み立てていくこと、また子供たちが聞きたいことを出し合って質問の内容を決めていくこと、グループ活動として進展していくこと、またインタビュー準備においてすべてを英語で進めるのではなく、母語で何をするのか、はっきりとした授業の概要をつかむこと等、この活動におけるさまざまな部分が上記の項目に当てはまるであろう。実際のインタビューにおいても英語で聞けないことは日本語で聞こう、ということで子供たちはさらに活動への意欲、また「人を知ろうとする」興味を深めていった。

またホール・ランゲージはもともと経験主義を説くデューイの理論をその基礎の一部にしているが、デューイは学習の経験における準備について以下のように述べている。

われわれはいつでも自分たちが生活しているその時に生きているのであって、ある別の時点で生きているのではない。また、われわれはそれぞれの現時においてそれぞれ現在の十分な意味を引き出すことによって、未来において同じことをするための準備をしているのである。このことこそが、長い目で見ると、将来に帰するところの何かになるための準備にほかならないのである。(デューイ・市村訳, 2004, p.74)

このことは上記のフリーマンの7つの原則を強く思い起こさせるとともに、筆者がこと小学校における英語活動の実践に当たる時、強く心に思い起こすことである。つまり年間10時間の英語活動の目的として考えられることは、幼い時のほうが英語の発音を学ぶのによいとか、何度も英語の歌を繰り返して耳で覚えるというような一般論的な早期英語教育の仮説を確かめることよりも、現在のその子供たちにとって学校教育の枠の中での英語活動を通した「経験」がどのような意味を持つかを考えることが大切ではないかということである。

その意味において外大訪問は2つの意味のある「経験」を提供できる活動であろう。まず一つは英語活動としての意味である。とりもなおさず「英語

で質問してみよう」ということ自体がその意味を位置付けるわけであるが、外大というキャパシティがそれを実現可能なものにさせ、子供たちに意欲を湧かせる。もう一つは言語教育を含めたもっと大義での人間を育てるという意味における経験である。知らない人に会うときのマナー、何語であれ挨拶や言葉づかい、実の意味をもった謝辞を述べること等を含めた教室の中だけでは実現できないことを経験できる。さらに言うならグループで協力しながらの活動でもあるためその教育効果を期待できる活動といえよう。

5. 指導計画

指導計画の手順としては、外大訪問の日程を決めた後、スケジュールをさかのぼるようにして数回の英語活動の授業を計画実施する。以下の指導計画は2006年度以降使用している計画案である。実際に外大訪問は2005年度から開始したが、2005年度の計画はおもに教師側が立てた案であったため、いくつかの点を改善して以下の計画にまとめられた。「なぜこんなに少ない回数でしか英語活動をしないのか」という疑問が生まれるかもしれないが、小学校の教育課程の中に位置づけられた英語活動は「総合的な学習」の一部であり、東町小学校においては年間10回程度が英語活動として実施される。またその10回のうちの半分に当たる5回は市教委によって派遣される講師との活動があるため、独自に計画できる枠としては数時間ということになる。またこの中での英語の表現の大部分は前年度の5年生の「校内の先生に英語でインタビュー」で一度やっており、それを思い出しさらに練習し、校内ではなく外に出ていく、という経験の広がりを意図して計画された。

指導にあたっては学級担任と筆者とのチーム・ティーチングが主要な部分を占めるが、子供たちはすでに前年度までの活動で筆者を知っているので上記の計画表の1は通常学級担任に任せている。日本語で外大でどんなことを質問したいかを話し合い、そこで出てきた内容をおおよその枠組みで2、3、4時間目の計画の中に入れる。ゆえにこの2、3、4時間目の計画とい

	トピック	学ぶ名称や表現	目的
1	外大はどんなところ？ 何を聞きたい？		大学の概要を知り、何を質問したいかを考える。
2	何を教えていますか？	What subject do you teach?	教えている教科を尋ねたり自分の好きな教科を言う。
3	数に関する表現	How many subjects do you teach? How many people do you have in your family?	数に関することを尋ねる時の表現と数の英語を知る。
4	場所に関する表現	Where are you from? Where do you live? Which country do you want to visit?	Where, Which を使った表現を知る。いくつかの国の名前を知る。
5	インタビューのリハーサル		インタビューの一連を練習する。
6	外大訪問		

うのは毎年子供たちから出てくる質問によって多少変化する。子供たちは前年度の英語活動で学習した内容を思い出しながら質問項目を考えるが、当然新しい表現や質問が出てくるし、その答えがどういうものなのかは予想の範疇ではないので、質問の答えが理解できない、ということは彼らも教師の側も承知である。その場合に、出来るだけわかろうとするためにどうしたらいいか、質問する相手に不快な思いをさせないで、インタビューを続けるにはどうしたらいいかという手立てを話し合うことも必要になる。英語では質問できないだろうから日本語で聞きたい、という項目も多くでてくるので、英語での質問が終わった後に日本語で質問しよう、ということにしてグループでの練習を重ねていく。

実際の表現を練習するためにグループ別での練習時間を毎回入れるが、その際に指導助言ができる学部生のボランティアを募り、指導計画の2から5に当たる小学校の授業には筆者に同行してもらっている。英語活動は午前中

の時間帯に予定され、しかも3クラス続けての授業になるので、学部生にとっては午前中いっぱい拘束されるボランティア活動である。それにもかかわらず毎年数人の学部生が献身的に子供たちの相手をしてきている。子供たちは担任や筆者とは立場が違い、いくらか歳も近い学部生をととても慕い、グループ活動が一期に活気づいていく場面を筆者は何度も経験した。指導計画3あたりで、子供たちが自分たちの班でさらに練習がスムーズに行くようにハンドアウト（巻末資料1）を配布する。文字指導をしていないとはいえ、質問項目を板書しながら練習するので、子供たちはハンドアウトに書かれている英語をどう読むか、ある程度は理解できる。このハンドアウトをもとにさらにグループ活動で誰がどの質問を言うかをきめてインタビューの流れのリハーサルへと発展していく。

6. 外大訪問実施

実施の1か月前には例年教授会において高校生らの大学訪問と同じように報告事項の一つとして小学生が多数訪問することが報告される。また事務方と筆者とは、雨天の場合の昼食の場所や子供たちの荷物の置き場所などを確認する。3クラスの6年生は各クラス8つのグループ編成がなされているので、ツアーガイドとなるべく学部生のボランティアを事前に最低24人募る。彼らは当日2限終了時に集合し、昼食時から終わりの会まで、子供たちに付き添って面倒を見てくれる。このボランティアの存在は非常に重要で、彼らの協力なくしてのスムーズな活動はあり得ないであろう。

さていよいよ小学生たちが外大にやってくる。子供たちは徒歩で小学校からやってくるが全員が12時前に到着し、2限を終えたボランティア学生らが集まったところで「出会いの会（始めの会）」を行う。子供たちの代表があいさつを述べたり、英語活動で学んだ歌を歌ったりする。また外大では学長があいさつに来てくれる。子供たちにとっては自分の学校に「校長先生」がいるように、大学には「学長先生がいる」ということがわかるが、その学長

先生のお話ということで緊張した面持ちである。そのあと筆者が簡単な日程説明をした後、ボランティアの学部生らに子供たちを引き渡す。そのあとはその学部生を案内役としてグループごとにキャンパスの各所で昼食を取り、その後活動開始となる。

各グループに必ず一人は学部生がついてくれるので、小学校の担任たちは特に注意が必要なグループに同行したり、自分のクラスのグループがどこにいるのかを確認しながら、子供たちのインタビューに同行したりしている。



実際には100人もの子供たちが一度に研究棟に行かないように各クラスの半分は前半45分間をめぐりに研究棟で外大教員にインタビュー、後半45分をめぐりにキャンパスツアーで外大内を見て歩きながら学生らにインタビューとし、残りの半分はその逆のパターンを取るよう計画実施している。

毎年この日は研究棟に小学生が行ったり来たりする状況で、いくら「移動は静かに」と注意してもかなりにぎやかな2時間が繰り広げられる。「エレベーターは使わないで2つの階段で移動する」という指導はかなり徹底されており、実際子供たちは1階から7階、8階まで平気で駆け上がるのであとをついていく学生のほうが大変そうな場面に何度も遭遇した。一人の先生のところへの訪問が集中しないように各階の様子をみながら案内すること、か



ならず一人は英語以外の先生のところへ案内することを学部生に伝えてあるが、彼らは実によく子供たちの面倒を見てくれる。毎年小学校の担任らが「外大の学生さんたちはすばらしい。本当に信頼して子供たちを

預けられる」と口をそろえて言っている。

研究室の前に着くと誰がノックするのかを相談しながらなかなかノックできずにいる。「大丈夫だよ。」という学部生の後押しでおそろおそろノックし、応答を待って緊張しながら部屋に入っていく。10分程度の訪問を終えて部屋を出てくる子供たちは筆者が見る限りどの子供も笑顔にあふれている。「すっごく緊張したあ〜！」と言いつつもその笑顔が彼らの経験を象徴しているのではないかと感じる。満足感、達成感、少しの失敗への後悔、驚き、自分たちが受け入れてもらったことへの安心感、それらが混ざった笑顔であろう。

子供たちは前もってインタビューに答えていただいたお礼にとカードを複数用意している。その礼状をどのように渡すのが礼儀なのか、渡すときの紙の向きまで確認しているらしい。用意したすべての礼状の枚数分の先生がたへのインタビューを終えてしまったが、まだ時間が少しあるのでもっとインタビューに行きたいがどうしよう、というグループが毎年現れる。「もっとインタビューに行きたい」といいながら「でももうサンキューカードないよ」ととまどいながらうろろうしているので、「カードなくても感謝の気持を表わせるのではないかと一言助言すると、グループでまた「どうする？どうする？」と言いながらも「ひとりずつ最後に握手をしよう」とか「代表者が握手をしてもう一度お礼を言おう」といいながら、意見をまとめたあと研究室のドアをノックしている。

実際のインタビューでは子供たちはどの質問を誰が言うかをあらかじめ決めており、その文章を一生懸命練習してきている。また先生がたからの答えが自分の知っている英語の



ポキャブラリの中にもないかもしれないことも知っている。相手が日本人の先生の場合 “In Japanese, please.” を最後の一手として事前の授業で教えているが、学部生らのサポートでとことん通訳してもらいながら進めたりしている。記録のために毎年いくつかのグループのインタビューの様子をビデオに撮っているが、緊張して自分たちが覚えてきた英語の質問を順番通りに言うのが精いっぱい、答えの意味がよくわからないままに次の質問に進む場面を見る。それらのことが良いわけではないが、「英語」「大学の先生」「はじめての場所」というさまざまな要素を考えると、そのような場面があっても仕方ないだろう。むしろそのような場面が多々あるにも関わらず、相手をし続けて下さった先生がたの好意を実感せずにはいられない。

キャンパスツアーで子供たちは、大学内の施設を見たり、案内役の学部生の友人をつかまえてもらってインタビューをしたりしてすごす。これもまた彼らにとっては異文化経験であり、大教室、生協、部活の様子など毎年子供たちの感想文にはいろいろな発見が書かれている。そして小学校の担任の先生がたは、子供たちがインタビューをお願いしてもキャンパスで出会う学生



の誰一人としてそれを断ったり、遊び半分に相手をする事ができないことに対して感謝されている。

45分の研究棟でのインタビュー、45分のキャンパスツアーを終えて子供たちは一端全員集合し、「終わりの会」を行う。全員がそろっていることを確認したあと、各クラスから挙手で一言感想を発表したり、忘れ物、落し物などが無いの確認し、最後に案内役の学部生にグループごとにお礼とお別れの挨拶し帰路につく。



この活動には初年度から毎年神戸市教育委員会からは指導主事が活動を見学に来ている。また大学広報からの記者発表が事前に行われるので2005年と2008年の「外大訪問」は翌日の神戸新聞に記事として掲載されたほか、2008年度はサンテレビの同日の夕方のニュースでも報道された。

7. 子供たちの感想

子供たちの経験を事後に書き残すことを小学校の担任の先生がたにお願いしている。外大訪問を実施するまでの英語活動の授業についての感想（何が一番勉強になったか、何が難しかったか、何が楽しかったか）そして外大に行つての感想（インタビューしてみたの感想）を自由に子供たちに書くよう指示してもらい後日その感想をもとに、担任たちと筆者との事後検討の話し合いを持っている。その話し合いは実施にあつての細かい齟齬や翌年のための改善点を洗い出そうという目的ではあるものの、小学校の担任たちは外大訪問が子供たちにとっていかに強いインパクトを持った活動であつたか、どれほど外大の先生や学生たちに感謝せずにはいられないかということをお話される。また子供たちの感想文には「とても緊張した」と「うれしかった」という表現が非常に多く目につくが、それが子供たちの正直な感想であろう。2008年度の実施後の「外大に行つてみたの感想」のいくつかを以下に紹介する。また実際の感想文の例を巻末資料2に提示する。



*楽しかったことは自分の英語がひとに通じたときです。そのときにうなずいてくれたのがとてもうれしかったです。

*先生の部屋で話をして自分の英語が伝わつたのがうれしくてたまりませんでした。質問以外で本を見せてくださったり絵の説明をしてくださりました。

- *最初の先生にインタビューするときはとてもきんちょうしていたけど、最後の先生のときはいいやくなってきているいろいろな先生に本を見せてもらってうれしかったです。
- *きんちょうしてちゃんと伝わるようにいうことがむずかしかったです。でもいろいろな外国人の先生や日本人の先生にしつもんしているいろいろな答えを聞いて楽しかった。外大は広くていろいろな人に会えて楽しかった。
- *英語も中国語もロシア語もおしえてくださって「外大の先生はやさしいな」と思いました。サンキューカードをわたす方向をまちがえてSくんと言われてびっくりしました。そしてわたしなおしてすぐはずかしかったです。
- *スペイン語で「ニーニョ」は男の子、「ニーナ」は女の子と教えてもらいました。nの上にある～がおもしろかったです。
- *中国の本、イギリスの本、英語の本などなど目が何個あっても足りないくらいすごかったです。
- *外国語大学だから外国語ばっかりやるのかと思っていたけど、「政治学」とか「文化」などを研究していておどろきました。
- *学長先生の英語の勉強は前にあるかべをたおすという話が印象に残っています。インタビューはとてもうまく行ってよかったです。ぼくは英語というかべをたおし、世界が広がったようになりました。
- *苦手だとおもってた英語がこんなに好きになった。
- *すごくきんちょうしました。まちがえても学生さんが教えてたすけてくれました。教授に外大にこいといわれたけどぼくはむりだと思った。
- *先生たちにいったことがつうじなかつたりして、ざんねんなこともあったけど、じぶんの言った英語がつうじたときが一番うれしかったです。
- *外大でお姉さんお兄さんといっしょに部活を見に行ったことも楽しかった。弓道をみたかったけど、ミーティングちゅうだったのでちょっとしょくだったけどとってもたのしかった。

8. 地域貢献としての振り返り

1年に一度、この水曜日の午後の外大訪問は、いうなれば「目に見える地域貢献」「居ながらにして出来る地域貢献」ではないかと思う。そして貢献する相手が小学生であることにそのユニークさがある。大学という共同体が持つ知的人的財産を地域に生きる小学生のために役立てている。子供たちにとっては練習してきた英語を使う場所であり、失敗が許されつつときどきわくわくして大人を相手に英語でのコミュニケーションの第一歩を確かめられる機会である。また大学キャンパスの中という非常に安全な場所で担任から離れ、グループで大学生と一緒に活動をし、新しい経験がたくさんある。彼らは家に戻ったその日、経験したことを様々話すであろう。

外大の教員や学部生が子供たちを暖かく迎え、文書や資料の山をどかしてまで子供たちに座る場所を作ったり、本棚から本を出して見せたり、質問の一つ一つに誠実に答えを考えたり、また子供たちにずっと付き添ってサポートしたり、我々ができるこの地域貢献の意味は大きいと思う。「この子はこうだから」といった情報や先入観のない我々は逆にどの子供にも同じように真剣に向き合っている。子供たちにとって、親兄弟や自分の学校の先生でもない大人が、自分を部屋に入れ、座る場所を作り本気に相手をしてくれるという機会がどれだけあるだろう。「外大訪問」は「英語活動」としてだけでは語ることでできないさまざまな経験を提供しているのではないか。その経験が何であるかはおそらく子供たち一人一人によって共通なものもあれば違うものもあるだろうし、教育効果はすぐにはあらわれるものではないかもしれない。

最後に2008年度の外大訪問のあと、筆者あてにきた見学者からの書状によってわかった心暖まるエピソードを添えて本稿を終えたい。この書状は神戸市近隣の市教委の指導主事からであった。外大が東町小学校に対して行っている英語活動支援に興味を持たれて当日来校され、子供たちが研究室でインタビューする様子を見学しておられた。その時子供たちは英語でのインタビュー

のあと、日本語で「どうして外大の先生になろうと思ったのですか？」と尋ねたという。インタビューを受けていた先生は、自分は子供の時、星に興味があり天文学者になるのが夢だったこと、でも中学に入ってから視力が悪くなりその夢をあきらめざるを得なくなり、それからは英語の先生になろうとずっと思ってきて今外大で英語の先生をしていると話したそうだ。その話を聞いた子供たちは思わずその場で拍手をしたそうである。それを見ていた指導主事は現在の教育が抱える問題の大きさが常に目の前にある毎日の中で、このように大学の先生が真摯に小学生の相手をしていること、そして小学生が子供らしい素直さで「思わず」拍手をしている場面を見て胸が熱くなったという。「人と関わる」この活動で生まれる出会いを象徴するエピソードであらう。








この外大訪問は言うまでもなく、外大の教員がインタビューを受けてくれることが前提になって可能になる活動である。多くの教員の協力によって毎年この活動が実施されているのは、小学校の教員らと筆者にとって本当に大きな感謝である。あらためて協力いただいた教員各位に感謝の意を述べたい。主役の子供たちにとっては「一大事」の半日であるのがその日の子供たちの表情を見ているとよくわかる。4回の実施を重ねた現在、今後もこの活動が無理なく続けられるような配慮を常に考えていかなければならないと筆者は考えている。

引用文献

- Goodman, K. (1987). *What's Whole in Whole Language*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Freeman, Y.S. & Freeman, E.D. (1992). *Whole Language for Second Language Learners*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- デューイ・市村尚久訳 (2004) 『経験と教育』 講談社学術文庫

外大訪問 (On December 13th)

Our interviewee (インタビューの相手) : _____

	Expressions & Questions	Answers	Name
1	Hello. My name is _____ . Nice to meet you. よろしくお願ひします。		全員
2	May we ask you some questions? 質問していいですか? May we have your name please? お名前を教えてくださいませんか?		全員
3	What subject do you teach? どんなことを教えてらっしゃいますか?		
4	I'm from _____ . Where are you from? Where do you live?	 出身はどこですか?  どこに住んでいるのですか?	
5	What country do you want to visit? どの国にいつてみたいですか?		
6	I like _____ . What's your favorite food?	 好きな食べ物は何ですか?	
7	I like _____ . What's your favorite subject? What's your favorite sport?	 好きな勉強は何?  好きなスポーツは何ですか?	
8	I have _____ people in my family. How many people (brothers) do you have? 何人家族ですか? (何人兄弟ですか?)		
9	Thank you very much. This is for you.	ありがとうございました  これはお礼です。どうぞ。	
10	Good-by. 		全員

資料 外大訪問のためのハンドアウト



Name _____

インタビュープロジェクトの授業と外大訪問を振り返って。

もっとも勉強になったことはなんだろう。

難しかったことはなんだろう。

私は英語を、覚えてしべたら
 良いと思っていました。だけどきいたり
 よんだり、かいたり、はなししているうち
 にただ覚えたりするたけいらない
 と思いはじめました。
 一番勉強になったことは、英語を
 通してたくさんの人とコミュニケー
 ションをとることができました。そして
 こんなふうに英語をしべている
 ということか、自分の中でも、たくさん
 の自信がわいてきました。

むずかしかったことは、単語を
 覚えた。何度もきくとあは"えられ
 たけどリズムがとりづらいいとこ
 ろもありました。

また、発音も少しむずかしい
 ところがりました。ついでに
 日本の英語をつかえてしま
 いました。もう少し、発音の
 練習をしたかったです。

楽しかったことはなんだろう。

外大に行っでの感想 (先生とお話して)

楽しかったことは、やはり「英語
 もはなせたことである。『むずかしい』
 というイメージがタタかったけれど、
 やはり、練習すると、できるよう
 になって、言えるということか、と
 とてもうれしく感じました。

たくさんの人と、たくさんあはな
 しか、英語ではなせるよくなった
 ので、とても楽しかったです。

初めはあまりきんちょうしていない
 感じだったけれど、インタビューし
 はじめると、かたにかかまってきんちょうま
 した。けれど、つたわって、たえてくたえて
 うれしかった。自分も英語をしべて
 いるんだ、ということも、ごためて感じました。
 本当の外国の方にもインタビューをし
 ちは、失敗するかなと思はれたけど、ま
 く明るく笑顔で、かんげいしてくたえて
 インタビューにもたくさん答えをくれた。さ
 げわたるので、よかった。ごま
 すごいきんちょうしたけれど、たくさん
 の人と話したりすることができたので、
 とてもいい勉強になった。すご
 楽しかったです。